



## Sponsor a Child

### クリスチャン パートナーズ 通信 第9号

- ・発行日/1991年5月 ・発行所/クリスチャン パートナーズ
- ・住所/〒281 千葉市園生町1223-1 A-705
- ・郵便為替口座/東京5-134994

#### ポール・チャン師を囲む会報告

Partners International(クリスチャン・パートナーズの国際本部)から送られてくるPrayer Letterの中で、シンガポール発の通信は、ほとんどPaul Chang 師の署名入です。そのChang 師が去る3月来日されました。

アメリカの諸教会と親戚を訪問されて帰国の途上、日本の援助会員と交わりを持つためでした。六本木の国際文化会館で3月13日の夕、会が持たれましたのでその模様を紹介します。



左端がポール・チャン師

ポール・チャン師は、私たちの幾人かは初対面ではありましたが、会は最初からうちとけた雰囲気では始められました。丸顔の童顔ということもあって親近感あふれる物腰。しかもシンガポールの神学校で教会音楽の指導もしておられる豊かな声量の賛美をもって私たちを主のご臨在の中へいざなってくださいました。巡回されたアメリカの諸教会でも、賛美と奨励のご奉仕をされたとのことですが、この最初の賛美を聞いただけで、その会衆との恵み多い交流の模様を彷彿とさせるものがありました。

このあと、松本理事と木ノ内理事の通訳を通してスライドを見ながら、アジア各地での主の働きをうかがいました。

まず最初のカリマンタン島。インドネシア最大の島で、私たちが援助している子供たちは、この島の西端の西カリマンタンと呼ばれる地域に住んでいます。川の上の家に住む人も多く、その川で洗濯や水浴、また用を足すということです。教会学校の様子や神学校の活動が紹介されました。

このあと、ビルマとタイでの伝道の様子が紹介されました。タイの奥地での伝道では、そこの迷信深い人たちとまじない師たちの話は、とても興味深いものでした。主のみことばによってそれらの迷信から解放され自由が与えられることの緊急性を感じさせるものでした。

生まれた赤ちゃんが双子だった場合、赤ちゃんは一人生まれるはずだから、どちらか一方は悪魔の子だということで、一方は殺さなければならないということです。



ところがまじない師は、どちらが悪魔の子かわからないといって、両方とも連れ去って殺してしまうということでした。何とも悲しい迷信の仕業に心も凍る思いがしました。

私たちが援助しているインドネシアに関しては、ポール・チャン師ご自身が中国本土から香港に16才の時単身脱出し、働きながら音楽の勉強をされたのですが、その間アメリカのクリスチャンの姉妹から援助があって勉強を続けることができ、現在、主のご用をしておられるという体験から、SACの働きがいかに重要で意義あるものであるかを私たちに十分感じさせるものでした。

最後に再びチャン師の主をたたえる賛美が私たちの心を喜びで満たし、名残を惜しみつつお別れとなりました。

#### ・ ・ ・ ・ 新会員の紹介 ・ ・ ・ ・

#### 田中穎穂・英子ご夫妻

いつも神様が、私たちをお恵み下さっているのを感じ、感謝しています。ある時、新聞でフォスタープランの大きな写真を見ていたら、そこに立っていた子供の大きな目が、私を捕えました。

「そうだ。本当なら私たちはもう一人子供を育てているはずなのだから、これは里親にならなくっちゃ」と思いました。そしてすぐに書類を送ってもらい、返送するばかりになっていたところ、鳥海姉を通して「クリスチャン・パートナーズ」のことを知りました。それならと、こちらに入れて頂くことになりました。

念願の女の子の母親になりました。筆不精な夫婦なので、なかなか手紙も書けないのですが、いつも写真を見ては「リナちゃん、元気かな?」「一生懸命勉強しているかな?」と語りかけています。

3月には、とても素晴らしいポール・チャン師にお会いできたことは、本当によかったと思っています。

この運動が、ますます広がりますようにお祈りします。

## 後藤公子師の講演会のお知らせ

長年インドネシアの宣教師として働かれた後藤公子師が帰国されましたのでお話を聞くことになりました。

◆日時 6月22日(土)午後2時～4時

◆場所 学士会館(神田一ツ橋)

会費など詳しくは往復ハガキでご案内します。

この会に先だち、「後藤さんを励ます会」から発行された「インドネシアだより」72号(1991年3月)を後藤さんのお許しを得て、ここに紹介致します。

主の御名を賛美いたします。

寒さもやわらぎ、春の訪れを感じる今日此頃ですが、いかがお過ごしでしょうか。長い間ご支援いただきましたが、インドネシアでの奉仕にひとまず区切りをつけ、現在は、新しい歩みにつき導きを祈り求めているところです。「インドネシア便り」は次回をもって最終号とさせていただきますので、今回は、あちらでの生活を振り返り、感じてきたことを書かせていただきますよう。

現在の日本とは正反対といってもいいほどかけ離れた状況のなかで、戸惑いながらも直感的に感じたのは、ここに何かほんものがあるということでした。言い換えると、人間の生の原点をそこで発見したような気がしたのです。そこには自然の法則、すなわち、天地創造の初めから人間のために創造者が定めて下さった法則に沿った自然な生き方や、貧しいがゆえに、物質に束縛されない精神的な自由さがありました。物質生活に関していえば、これでも生きられるという最低の見本を見せられる思いでした。しかしそのことを通して、人間にとって無くてならぬもの、最も大切なことは何か、ということが、より鮮明になったような気がします。そしてそのことを色々な場で訴えてきたのは、現代の日本人が知らず知らずのうちに、人間として大切なものを失ってしまっている、と痛感したからにほかなりません。

教育があって経済的に豊かな人々は幸福で、教育がなく貧しい人々は不幸だ、というような偏見が真の意味で正されたのは、インドネシアでの奉仕を通して

でした。彼らのなかにあらわされている創造者の豊かな恵みを見たとき、自分自身の価値基準は、おのずと変えられました。その種の偏見がどれだけ他者を理解することの妨げになり、私たちの交わりを損なっていることかと思うのです。その人の本当の価値は、そういった偏見を捨てて創造主の作品として相手を見るとき、はっきりと見えてくると思うのです。外面でだけ人間の価値を決める社会では、おのずと、お互いに背伸びをして、本当の姿を見せまいとし、深い交わりができなくなるのがふつうです。そういった意味で、私とインドネシアの人々とのつきあいは、たいへん恵まれたものでした。たったひとりの日本人でありながら、一度も外国人であるがゆえの寂しさを感じたことがなかった理由のひとつはそこにあります。私が今なお、あちらでの生活を懐かしく慕わしく思っているのも、そこに殻をかぶらない素裸の交流があったからです。

インドネシアにいった当初、色々な場々とまどいを覚えた理由のひとつは、いわゆる「ものさし」の違いでした。全く違った環境で生まれ育ち、異なる教育を受けてきたのですから、生活の仕方や考え方が違うのは当然でした。絶対的な次元で正邪の区別ができる場合は別として、問題の多くは、相対的な次元すなわち「ものさし」の違いから生じてくるものでした。特に衛生観念の違いは大きく、最初は気分が悪くなったり、腹立たしく思ったりしたものです。日本では考えられないことですが、今でもインドネシアの多くのところでは、ごみ箱がなく、ごみを家の回りや道路に捨てるのです。私の仕方で成功したことのひとつは、ごみ箱をあちこちに備え付けて、根気よく、ごみはごみ箱に捨てるよう言い続け、一年かかって、やっとその習慣が定着したことです。しかしその他の多くのこと、例えば、お皿をもく浴や洗濯をしている川の同じ場所で洗ったり、ひとつのバケツを様々の用途に使うなどのことは、私の方が譲歩することになりました。そのときの判断の基準になったことは、そのことによって病気になるなどの悪い結果が起きるかどうかが、彼らがそうする理由は何か、また、絶対的な次元の問題か、ということでした。日本と違って、極端にきれいな水が不足していたり、用途別に分けるだけのいくつものバケツを買う余裕がないことを思えば、うなづけることでしたし、私の知っている限りでは、そのことによってだれも病気になったことはなかったからです。そのようにインドネシアの人々に合わせていく中で、彼らの心が開かれ友人として受け入れら

れていったような気がします。またそのことを通して、主が豊かに働いて下さっていることを実感し、そのことが奉仕のエネルギーになったのはいうまでもありません。御支援を心より感謝して。

1991年3月1日

後藤公子

### 9号の編集を終えて……

皆様お変わりありませんでしょうか。

この9号は3月のポール・チャン師を囲む会のあと発行する予定でしたが、3月末海外へ行って、帰った4月には2週間も病に伏してしまい、大変遅れましたことをお詫びいたします。

6月には、後藤公子さんの会に皆様とお会いできるのを楽しみにしております。

上野 巨

